

2021年度

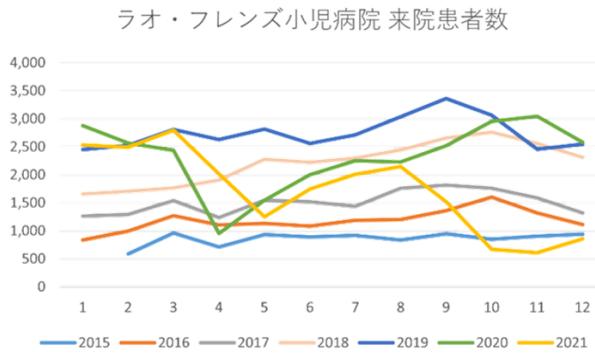
事業報告書

特定非営利活動法人フレンズ・ウィズアウト・ア・ボーダーJAPAN

1 事業の成果

ラオスにおいて新型コロナウイルス感染症の感染者が急増し、4月及び10月に厳しいロックダウン措置が取られたことにより、人の移動が制限された。この制限の影響を受け、来院患者数の減少、院外活動の自粛（緊急性の高いケースを除く）、専門外来の一部を一時中止など、ラオ・フレンズ小児病院（LFHC）の活動へ支障が生じた。入院病棟はコロナ禍以前と比較し入院患者数は3分の2前後で推移していた。隣接するルアンパバーン県立病院に新設されたコロナ専門病棟における小児感染患者が増えたことを受け、

LFHCの医師と看護師1名ずつをコロナ専門病棟へ派遣し、県立病院との協力体制を構築した。院内教育（オンライン含め）に加えスイス赤十字との協同研修プログラムとして県内の郡立病院スタッフを対象とした研修を実施した。医療知識や技術を都市部だけにとどめず地域へ広め、教育の機会を増やすことに努めた。アウトリーチプログラムが行う訪問看護においては、徹底した感染予防対策のもと緊急の患者をはじめ、緩和ケア、服薬を切らせてはいけない患者等を中心に保健局の許可を得ながら活動を継続した。活動が制限される中、必要とするすべての患者へのケアの手を止めることなく、スタッフは予防衣（キャップ、マスク、手袋、ガウン、シューズカバー）を装着し、ケアに当たった。



助成事業として、カンボジアの「アンコール小児病院（AHC）」及び日本国内で子供たちに安心できる居場所を提供する「NPO 法人『居場所づくりプロジェクトだんだん・ばあ』」へ助成支援を行った。AHCに対しては、医療教育活動及び地域医療支援教育活動への助成とした。具体的には院内外の医療従事者と医療学生に対する教育を実施、カンボジア農村部での小児医療に関する知識や技術向上を目指す地域コミュニティ活動が実施された。日本国内で活動する「だんだん・ばあ」への助成事業は、2月～3月に実施したバーチャル・チャリティーランニング（身体も心も健康に、離れていてもみんなで繋がり、支援を届ける企画）を通じた支援金の半分をだんだん・ばあの「トリセツ（目的や場所の使い方等をまとめたもの）」の作成費用として助成した。

日本国内においては、コロナ禍の長期化を見越し、対面型でのイベントは中止とし、オンラインを通したコミュニケーション方法を模索した。動画配信の他、“言葉”で伝えるラジオ風の配信方法を新たに取り入れ、YouTube配信を試みた。引き続き学生インターンを受け入れ、学生が主体となって発信するブログを開始し、活動への関わり方は様々であることを伝える機会へと繋げた。その他クラウドファンディング、寄付キャンペーン、助成金申請等を通して多方面にわたる資金調達に努めた。知名度向上に繋げるため、年次報告書、パンフレットのリニューアル版の発行や、SNSを活用した。病院への寄贈品は、コロナ禍の影響を受け現地への輸送・運搬が厳しい状況が続いたが、緊急で必要な整形外科用の装具を優先に現地へ届けることができた。

2 事業の実施に関する事項

(1) 特定非営利活動に係る事業

(事業費の総費用【 130,697 】千円)

事業名	事業内容	実施日時	実施場所	従事者数	受益対象者の範囲及び人数	事業費の金額(千円)
助成事業	アジアの恵まれない子供たちの医療支援を目的とする団体へ助成を行う。	通年	アンコール小児病院	400名	1)カンボジア人医療従事者のべ4,000名以上 2)不特定多数のカンボジアの子供、教師や地域住民	43,664
助成事業	アジアの恵まれない子供たちの医療支援を目的とする団体へ助成を行う。	4月	だんだんばあ	30名	だんだん・ばあの利用者(子供、家族、ボランティアなど) 不特定多数	176
医療施設運営・教育・予防事業	「ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)」の運営、医療・教育・予防事業を行う。	通年	ラオ・フレンズ小児病院	169名	1)不特定多数のルアンパバーン地区の子供 2)LFHCスタッフ、他医療施設スタッフ及び患者家族のべ200名以上	71,213
スタッフ派遣事業	専門家を派遣し、スタッフや住民へ医療・予防教育等を行う。	通年	ラオス、カンボジア	1名	現地スタッフ約170名及び不特定多数の地域住民	579
医療物資等運搬事業	病院のために寄贈された物品や備品等の輸送手配や、運搬を行う。	通年	法人事務所、他	5名	不特定多数の医療従事者と患者	34
普及啓発事業	WEBサイトやリーフレット、年次報告書の活用、イベントなどで広報に努める。	通年	法人事務所、他	5名	不特定多数の寄付者及び参加希望者	15,032